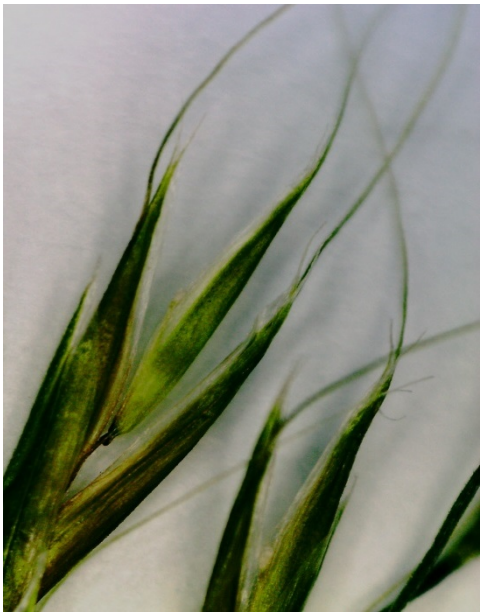
イネ科通信 41

カニツリグサ

平地の草原や道端に普通な多年草。稈は束生、柔らかく、高さ 40～70cm、葉身は平らで長さ 10～20cm、幅 3～5mm、表面は無毛または長い軟毛がまばらに生える。葉舌は長さ 0.5～1.5mm。円錐花序は長さ 10～20cm。幅 2～5ｃmほどで、やや先が垂れ、枝は 1 節に 2 本出て、基部近くから先まで小穂をつける。小穂は長さ 10～20cm、幅３～5mm ほどで、やや先が垂れ、枝は普通 1 節に 2 本出て、基部近くから先まで小穂をつける。小穂は長さ 6～8mm、2～3 小花からなり、普通黄緑色または黄褐色で、全体に光沢がある。包頴は披針形、大きさがまったく異なり、長さ 2～3mm および 5～6mm。護頴は長さ 5～7mm、紙質、小凸点が前面に散らばってはなはだざらつき、先は深く 2 列、裂片の先は細くて芒のようにとがる。芒は 2 裂片の間から出て、長さ 6～10mm、途中でよじれ、急に折れてはじめ側方、のち下方に反り返る。内頴は膜質、長さ護頴のほぼ 2/3 で、ほとんど中央部まで 2 列する。（以上、平凡社、日本イネ科図譜、長田武正著より）

名前の由来：花穂のついた稈（茎）で子供がサワガニをつって遊ぶことから名前が付けられました。

花穂の色：緑色や褐色を帯びています。数年前、岡山県立自然保護センターで全草朱色のものをみかけてびっくりしたことがあります。でも、独特の光沢からカニツリグサということが判りました。また、その付近のイチゴツナギも朱色でした。周囲をみると土壌の色も朱色でしたのでその土壌の成分を吸収したものと思いました。

左の写真は道端で見かけたカニツリグサです。独特の光沢をもっています。

下の写真左はカニツリグサの花穂の一部です。その先端部を拡大したものが中央、右端は更に先端の部分を拡大したものです。